

——2018年発売のアルバム『SUPER SALT』聴きました。曲を聞くと、非常にロマンチックというか日本の意味での詩人だなと。そういう方面の活動は考えていらっしゃいますか？

自分で俺はロマンチストだとはあんまり思わないです。詩情っていうのは大事だなと常々思っているんでそこは意識してますけど、行き過ぎないように、まあバランスですよ。キザになり過ぎてもダメだし、かといって日記みたいな詩でもそれはそれでチープだし、丁度いいバランスは考えてます。

——最近、テレビ番組のゲスト出演など、色々な方面でのお仕事が増えてきてますね、

今はTwitterなどのSNSで「こういうことが得意」っていうのがプレゼンテーションしやすく、それで興味を持ってもらって、色々な話が来ることが多いです。

——勝ち上がった後もフリースタイルのバトルに出る理由はなんでしょう。

「負けるために立ってる」とまで言うのアレですし当然勝ちたいですけど、単純に勝ち逃げはないよなと思って。下を育てるとか、別にバトルやってる後輩がどうなろうと知ったこっちゃないです。ただ負けることはマイナスだとは思ってない。

音楽とか芸術関係はなんでもそうだと思うんですけど、人に教えてもらってどうこうじゃ



サイン入りの最新アルバム『SUPER SALT』(Jet City People)

なくて下が上を食ってやる気持ちでやるものだと思う。自分が先輩だとも思ってないし対等だと思ってるから、下を育てるっていう気持ちはないです。ただバトルに出ることで結果的に下というか層は厚くなるかなって。

——日本のヒップホップの未来について

ヒット曲を出すだけです。それはもう分かってて。やっぱ一曲でもヒット曲があれば黙っててもお客さんは来る。僕らの商品は音楽なんで、そのヒット曲がない状態で盛り上げようとしても客が来るわけがない。だからいい曲を作るっていうのをずっと考えてます。それは僕じゃなくてもいい。ヒップホップで、誰か出てくれたらいいなって。

ヒップホップってワンマンでやる文化じゃないんですよ。パーティの中にライブが組み込まれてるから、一人ブチ抜けた奴がいるとパーティ全体の為になる。そしてそこで他のアーティストを知って他のイベントにも遊びに行き、クラブに人が増えていくのが最終オクサーっていうか。そうする為にはテレビに出るとかじゃなくて、テレビはお小遣いの為に出るだけなんで、一番でかいは象徴するような代表曲を作ることだと思ってる。もうずっとそれを考えてるんですけど、まあ外してるんですけど(笑)。良い曲が書ければ、全部上手くいくと思ってるんです。

——在学生にメッセージなどありますか？

これは祖父江博史先生(2018年度までイラストレーションコース准教授)の受け売りなんですけど「就職活動しなくていいよ」って言われて、それを真に受けて僕は一度も就活をしなかった。先生が言うには「アーティストとしてやっていこうと思うなら、初めは飯食えなくて当然。その業界の20年選手と新卒1年目がいきなり対峙しても敵うわけがない。フリーターやったり女のヒモやりながら作品を作り続けていけば30歳位で少し仕事が入ってくるようになるから、そういう気持ちでやればいいよ」って。

6月、club buddhaにてスペシャルゲストとして出演。ライブ中謎の木片(花見の時拾得したとのこと。表紙・下写真と同じ)を持ってパフォーマンスする。



僕は当時は漫画でしたけど、フリーターもやっただし今の嫁さんのヒモもやって本当に30歳位から仕事になって飯が食えるようになった。「先生が言った通りだったなあ」って。だから20代貧乏しながら作品に没頭した方がいいかなって思います。

あとは学生の内が一番自由なんで、目一杯遊んでください。アーティストになるなら、創作活動始める前までの経験っていうのが一番肝になってくるんです。自分が何者にもなる前に吸収したもので差がつく。別に吸収する為に絵を見ろ、本を読めという訳じゃなくて、興味を持てる遊びでもゲームでも、なんでもいいから学生の身分を利用して遊びまくって、家が金銭的に裕福な奴はガンガン留年して居れるだけ大学で遊んで、その、勝負は後回しにしたほうがいいと思います。

——ご自身の大学生生活はいかがでした？

4年で終わりました。でも一年生の時は遊び過ぎて19単位しか取れなくて、レビューもやらなかったんですよ。それで教務課に呼び出されて「このまま進級はできない。一人レビューみたいなのを準備して展示しなさい。」と言われた日を、僕寝坊したんです。慌てて行ったら先生たちカンカンですよ。もうこれは大学辞めるしかない、言いに行ったところに丁度祖父江先生が通りかかった。それで「イラストだったら拾ったぞ」って言ってきて、「お前みたいな奴は自分のコース来ても絶対通用しない」って結構言われたけど、もうそこしかなかったんでお願いしてイラストに入りました。2年生になって最初の日にプリントを一杯渡されて説明を聞いたと思うんですけど、聞かずにずっと落書きをしてたら祖父

江先生が「三嶋を見ろ」って。怒られるか？と焦ったら「ああやって何をしてる時でも手を動かす癖をつけろ」って言われた(笑)。

そこから僕はどんなプレゼンでも一回も怒られたことなく、甘やかされてたと思うけど先生にはすごく恩があります。不条理な事言う時もありましたけど、僕には無茶苦茶優しかった。それで、ちゃんと卒業しなきゃなって。だから4年生になっても下級生と同じ頻度で学校に行っていました。でも「そんなけやってっただのに、今は音楽やってんのかい!」って感じかもしれないけど(笑)



呂布カルマ(りよぶ かるま)
1983年大阪府生まれ
ラッパー。大学卒業後フリーターを続けながら漫画家を目指すも挫折、その後本格的にラップを始める。テレビ朝日に放送中のバラエティ番組「フリースタイルダンジョン」の2代目モンスター。ラップバトルにおいて圧倒的な強さと哲学的なリリック、独特のファッションで注目を集め全国的な知名度を誇る。ヒップホップレーベル「JET CITY PEOPLE」(<http://www.jetcity-shop.com/>)の代表を務め、名古屋を拠点に精力的に活動している。あいちトリエンナーレ2019の「円頓寺デイリーライブ」にも出演。

名古屋芸術大学卒業制作展、大学院修了制作展 学内開催について



今年度も卒業制作展・大学院修了制作展は学内開催に決まりました。日程は以下の通りで今年も同時開催になります。詳細につきましては追って発表されますので、大学のホームページをチェックしてください。

第47回 名古屋芸術大学卒業制作展

第24回 名古屋芸術大学大学院修了展

会期[予定]

2020年2月21日(金)―3月1日(日)10:00-18:00

昨年(2018年度)より、同窓会が選ぶ優秀な卒業制作に送られる賞として『同窓会賞』を設定しました。美術領域・デザイン領域共に1名ずつ選び、美術からはアートクリエイターコース(ガラス)和田彩都さんの《To mom》、デザインからはヴィジュアルデザインコース橋本佳吾さんの《BOX BOY》を選出しました。



インタビュー中。ライブ前にお話を聞いた。
撮影協力 club buddha / SHIVA



日本から韓国へ。
美術留学の先駆的存在。
上杉真由さん
美術学部彫刻科 22期卒



KCTV 済州放送 多文化シチュエーションコメディ 『하이퐁 세 가족 (ハイフォン・ファミリーズ)』に出演の1シーン。

——韓国に行くことになった経緯を教えてください。

ちょうど大学4年生の時、韓国慶南大学の権永鎬(クオン・ヨンホ)さんという洋画の先生が、名古屋芸大に研究のためにいらっしゃっていたんです。それで先生の研修があと1年という時に相談したら、「日本では大変良くしてもらって感謝している。韓国の私の大学に来て学んだらどうか?」と言ってくれました。

名芸大では作品制作はもちろんですが、教師にもなるのも目的で教員免許も取りました。91年入学当時は芸術大学でも浪人は当たり前というくらい狭き門で、なんとか二次募集で合格したんです。当時は、まだまだ珍しかった現役女子芸大生の日展初入選ということで、新聞にも大きく取り上げてもらいました。あれは神戸大震災翌日の新聞だから、95年ですね。そうやって頑張っている時に、たまたま大学図書館で韓国の「慶州南山(キョンジュナムサン)※1」の図録を手に見たら、磨崖仏の写真が沢山載っていました。子どもの時に修学旅行なんかで、奈良や京都へ行って仏像を見ても全然ピンとこなかったんですけど、でもその本で、岩に刻まれた仏像群を見た時に「あ!私これだ!」って思ったんです。

日本で作家としてこれからって所もあったんですが、荻原碌山の彫刻も大好きで、彼の様に一度は海外で色々なものを見てみたいという想いもあったんです。そんな時に磨崖仏とクオン先生に出会って、一気に韓国留学に繋がって、父と母に「一年だけでも良いから行きたい!」ってお願いしました。

でもビザ取得が大変で、当時韓国への美術留学なんて前例が無く「何のために韓国に行くのか?」と、在大阪韓国領事館で言われてしまいました。語学でソウルへの留学はあったけれど、美術での地方留学なんて、理解されませんでした。私はどうしても行きたくて「日展にも入選した!」って新聞記事も見せてアピールしていたら、「では理由書を提出してください。」と言われ、それを必死に書き、ようやく許可がありました。

——留学中はいかがでしたか。

最初の一年目では、慶南大学のアトリエで制作しながら、慶州にある南山に毎週水曜日に入り、木曜日の朝からお昼過ぎに掛けて登り、6世紀か

ら7世紀頃の時代に彫られた摩崖仏などの仏像を写真に撮ったりしてたかな。

ただ私が行ったのは'95年で、ようやく韓国で日本映画が解禁されるという状態。※2 しかも学生運動が起っていた最後の時期で、紛争に巻き込まれることもありました。あの頃はビザがなかなか下りないことに始まって、時には日本と韓国の関係について、厳しく意見を求められたりする場面もありました。でも全てが海外留学での貴重な経験として、大変でも受け入れることができました。

——テレビのドラマやバラエティ出演と、色々な方面でご活躍とうかがっています。

テレビのお仕事では、韓国のドラマで「sitcom」って呼んだりしますが、要はコメディードラマで、私は途中からでしたが、「済州島(チェジュド)に引っ越してきた真由ちゃん」という、言ってみればトラブルメーカーの役割で出演しました。現在はベトナムで放送されています。

美術関係では、大邱美術館の日本語サイトを担当していたり、日本のアーティストが来韓すると記者会見やシンポジウムでの同時通訳もしています。あと演劇やジャズフェスティバルのプロデュースもしたりしました。それから碌山美術館(長野県安曇野)の許可を頂き、碌山の伝記書籍を韓国語に翻訳し出版もできました。

そして、私は今年で韓国生活の方が長くなってしまいました。24年前、韓国へ渡った美術留学生の先駆けとしてあった私の役割が、いつの間にか韓国で暮らす外国人(韓国では「移民者」と呼ぶ)、特に大邱・慶尚北道地域の外国人全ての人がお世話になっている大邱出入国管理事務所が認めた代表会長になっていました。

現在、二重国籍だった息子が韓国籍からの離脱が許可され、熊本の高校に通っています。韓国で働く母である私が息子の授業を見学に行ったり、私の両親の出会いを再現したりする内容が、日本のTVニュースで紹介されました。

作品を制作する機会は減りましたが、美術の世界で貢献しながら、忙しい日々を送っています。

※1=韓国の慶州市内の南に位置した山で、新羅時代の仏教文化を存分に鑑賞出来る重要な遺跡地

※2=1998年に発表された「日韓共同宣言 21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」に基づき、韓国国内で日本文化が4段階に分かれて少しずつ開放されてきた。



碌山美術館(長野県安曇野)学芸員の武井敏氏と碌山の作品《労働者》前にて撮影。



「TKU プライムニュース」にて密着取材された時の模様。韓国のクイズ番組出演中の様子を紹介。(TKUテレビ熊本2018年8月28日放送)



名古屋芸大同期の仲間たちが集合。懐かしい話で盛り上がる上杉さんと皆さん。(右からデザイン上田さん、ピースサインが真由さん、彫刻大路さん、同じく彫刻鈴木さん)

うえずぎ まゆ=1972年熊本市生まれ、韓国慶尚北道慶山市在住。現在、東明大学校学部教養大学ソフトウェア融合大学情報保護学科にて准教授として勤務中(釜山広域市、韓国)

'95年、名古屋芸術大学美術学部彫刻科を卒業。'96年まで慶南大学校(韓国)教育大学院美術専攻大学院研究課程に在籍、その年嶺南大学校一般大学院美術学科彫塑専攻修士課程に移り、'09には同大学院美術・デザイン学科美術専攻博士課程にて単位取得退学(博士課程修了)。

韓国にて美術館やアトリエでの通訳や翻訳の仕事にはじまり、TVなど各メディアにもコメンテーター、女優、タレントとしても活躍。また韓国に移住する日本人を含めた外国人のために、各種サポート活動も行なっている。

産学協同プロジェクト アイホン×名古屋芸術大学



竹内基浩さん デザイン学部 工業デザインコース 33期卒

——竹内さん、会社でのお仕事を伺います。ご自身の学生の頃を思い出されたかもしませんが、今回の講評会の感想をお願いします。

私が勤めるアイホン株式会社はインターホンやナースコールを主に製造しているメーカーです。私は操作画面などのユーザーインターフェース(UI)のデザインを担当しています。

工業デザインコースを卒業し、その後、プロダクトデザイナーを経て、車関係のインターフェースに携わり、現在のアイホン株式会社にてキャリア入社しました。

まだまだUIデザイナーとしてはキャリアが浅いので、日々勉強な部分もあり充実しています。これからも、プロダクトデザインのキャリアを活かし、幅広く活躍できるデザイナーを目指す所存です。

十数年ぶりに学校に来て...非常に懐かしかったです。久しぶりに学食も食べたいと思い、食券のシステムも変わってない事に安心し、在学中によく食べたチキンカツ定食を食べました。昔の教室内や通路にスチレンボードの破片などが散乱していた風景を思い出しつつ、学内を散歩しました。

産学共同プロジェクトとして、授業に参加させ

——本学デザイン領域工業デザイン&セラミックデザインコースでは、企業との協同プロジェクトを積極的に授業に取り入れており、これまでいくつかの企業と共に様々なテーマで商品企画を展開してきました。今回2019年度に進められている一つとして「アイホン株式会社」との協同が企画され、三枝樹成昭先生の授業(前期デザイン実技 IV[ID.CD])のアイホン×名芸協同プロジェクト最終プレゼンテーションにタイミング良く立ち会うことができました。またアイホン(株)には33期ID卒の竹内基浩さんが所属されており、その授業を取材させていただくこととなりました。



全員でアイデアスケッチをひとつひとつ検証していく。



三枝樹成昭先生



和田義行先生



学生のプレゼンを観ながら積極的に意見を交わす。



片岡祐司先生

て頂き、授業では、企業側の人間として、アイデアの講評と、最終プレゼンに向けてのアドバイスをさせて頂きました。

プロジェクトの最終プレゼンでは、学生らしい伸び伸びとしたアイデアが発表されており、社会人慣れしてしまった私にはない発想が、羨ましく思いました。今の学生らしいニュートラルな発想は、社会人になっても大事にして頂きたいです。

今回の産学共同プロジェクトでの活動は、社内でも好評でした。私以外の参加したメンバーも、

各々が刺激を受けていたので、アイデア発掘の目的以外にも、嬉しい効果が得られました。

また機会があれば、是非参加させて頂きたいと思っています。

今後も、デザイナーとして、古い表現ですが日々精進したいと思います。

様々な技術が開発され、技術の進歩が激しいので、常にそんな気持ちじゃないと付いていけないです。幅広い、知識をつけ広い視野を持ったデザイナーになれるよう、努力していきたいです。



授業終了後は、参加者の皆さんの緊張も解けアットホームな雰囲気の中、アイホン(株)、教員、学生の皆さんで記念撮影。

豊かな経験がひとつに繋がっていく

落合晶代さん 33期卒

美術学部絵画科日本画コース



2019年3月に開催された個展にて、ご主人とヴァイオリンの演奏。

大学院修了後は暫く飲食店でアルバイトをしながら、カフェの展示スペースなどで発表を続け、地域のアートイベントにも参加したりと、自分の道を模索していました。また、高校の部活動で始めたヴァイオリンは、その後もずっとオーケストラサークルに所属し、定期的に演奏を続けてきました。美術も音楽も同じくらい真剣に取り組み、交友関係を広げていきました。

経験を積み重ねていくにつれ、自分が培ってきた経験を生かす仕事をしたいと思い始めました。そんな時に、5/R Hall&Galleryのオープンを知り2010年10月より勤めています。

現在は、夫と立ち上げた会社を通して、5/R Hall&Galleryの美術ギャラリーに関する企画・運営をしています。2010年にオープンしてから9年間、10～90歳代のおよそ450名の作家と展覧会を開催してきました。主な仕事は、企画の考案、作家への依頼、スケジューリング、広報活動(DMデザインや発送作業、取材の対応)、展示作業、販売手続きです。最近では作家インタビューを動画で配信しています。学生や卒業後も作家活動を続けていきたい方の相談を受けることもあります。また、ギャラリースペースを借りていただく方へのサポート(DM作成や展示作業、販売手続きの代行)も行なっております。

ギャラリーでの仕事の面白いところは、作品を通して作家の生き様や価値観を感じられることです。生きていく上で重要なヒントに気がついたり、心に響く色彩や形を見て感動することもあります。そして物事をしっかりと考えるきっかけにもなります。しかし、ギャラリー・画廊へ足を運ぶことは比較的非常日であり、作品を見て楽しみ、販売につながるまでは大変な時間と労力がかかることを

実感しています。

芸術の分野が、人間をより豊かにしてくれることを日々発信し、身近でない方にも近づいてもらえるよう、毎日試行錯誤しています。私自身も作品制作を続けることによって、作家活動とそれを応援する側の両方を学び、お互いに向上できる道を探っています。

「手に職がつくのは6年目から」と聞いたことがあります。6年楽器を続けた時、演奏する楽しさを知りました。そして大学院を修了した頃に、ようやく日本画のスタートラインに立った気がしました。そしてギャラリーの仕事に携わって6年経った頃、自分の立場とこれからの目標が明確になりました。ようやく自分の経験が1本に繋がった気がしています。自分の能力を最大限に発揮できるのは、とても幸せなことだと実感しています。

5/Rで経験を積み重ねるにつれ、教育の普及も大切だと感じ、「MuFa」(Music & Fine Arts)を名古屋市千種区でスタートしました。音楽や美術の先生をお招きし、大人と子供が自由にのびのびと芸術を楽しめる空間を目指しています。

私が担当する子供の美術教室では、自由に絵画や工作を楽しむ中で、一人一人が何を大切にしているか、何に感動しているかを見極め、成長に合わせてサポートしています。大人の教室では、技術的な指導はもちろん、コミュニケーションをとりながら、それぞれの目的に合わせて進めています。できるだけ自分自身で考え、失敗と成功を繰り返し、成長へとつなげています。

音楽と美術を学んできた私は、利用する道具や手段は違っても「表現することは共通している」と実感しています。「楽譜を見て色彩を感じる」ことや「絵を描いてリズムを感じる」など全てリンクしています。また、文学、歴史、数学、物理、化学、生物、哲学、等々多くの学問が、芸術に繋がっていることを、それぞれの視点から繋げていきたいと考えています。相手の視点から解説することで芸術を楽しむキッカケとなり、いろんな作家の作品に近づく一歩になります。

4年前にパリのアーティストレジデンス、シテ・インターナショナル・デザールに3ヶ月滞在しました。大規模なアートフェアFiacにて、世界中のアートを拝見しました。便利な物で溢れる先進国のアートは、シンプルで冷ややか、発展途上の国からは、あらゆる物がゴテゴテと貼り付けられ情熱的な作品が多いように感じました。同じ時代を生き



個展「-花音-」ギャラリーいまじん(岐阜) 2019年3月



美術教室「MuFa」(Music & Fine Arts) 親子で参加するワークショップの様子

る人間が、育った環境の違いで何を美として捉えるのかが、こんなにも極端に違うのかと驚きました。日本に生まれ育ったことを認識し、今の時代を見つめ、作品を通して後世に知恵を残すことが大事だと感じました。さらに、滞在中パリ同時多発テロが起き、怒りと悲しみの街を肌で感じました。教会で慈しむ人や、親切な行動、些細なことでも感謝をし合う街の人々を見て、今自分にできることを一生懸命探しました。

これらの経験は芸術を通して発信し、人々が深く考え賢く生きていくために、これからも活動していきたいと考えています。

ギャラリー、教室、自分自身の作家、音楽などの活動が、多くの人の架け橋となり、1人1人の心を充実させ、気持ちよく生活ができるようになれば本望です。

◇株式会社 美音

<http://www.be-on.biz>

◇5/R Hall&Gallery

<http://www.five-r.jp/gallery/top>

◇落合晶代さんのFacebookもご覧ください。

<https://www.facebook.com/akiyoochiaiNMP/>

おちあいあきよ=1983年愛知県名古屋市生まれ

'06年 名古屋芸術大学美術学部日本画コース卒業

'08年 同大学院美術学部日本画研究領域修了

'05年 第37回日展初入選【東京・名古屋】

'06年 第41回日春展初入選【東京・名古屋】

以降も個展・グループ展開催や画会の入選多数。

今年'19年は3月の個展に続き、4つの展覧会に出品予定。

～幼い頃から、クラシックバレエ・書道などを習い、

高等学校では管弦楽団にてヴァイオリンを始める。その後も社会人オーケストラに入団して演奏を続ける。

現在『5/R Hall&Gallery』にて勤めるかたわら、

31歳の時立ち上げた『株式会社美音』での企画活動も精力的に行なっている。

——現在名古屋芸術大学西キャンパスにあるアート&デザインセンターのスタッフとして働いていらっしゃる市原萌絵さん。大学以外でも数々のお仕事経験を積んできた彼女にこれまでの経緯など伺いました。

大学に戻ってくることになり、3年目になりました。卒業してからは出版社に就職し、編集部で働いていました。アポを取って取材に行って原稿を書いて校正してと一連の流れを行い、初めて雑誌ができた時は感動しました。

その後退職して数年が経ち、ご縁があってあいちトリエンナーレ2010のお仕事に少し携わる機

会をいただきました。そこでは公式ブログの記事を担当していて、あらゆる会場を巡りすべての作品を観ました。その時に知ったアーティストや作品は今でも心に残っていますし、それをきっかけに交流するようになったアーティストもいます。

あいちトリエンナーレのお仕事が終わった頃、地元の一宮市にある三岸節子記念美術館で学芸員さんの産休代理のための非常勤職員募集がありました。駄目もとで受けてみたところ、運良く採用に!教育普及部門の募集で、未経験からでしたが5年間勤務しました。ワークショップや展覧会の企画など多くの経験を積ませていただき、中でも愛知県美術館が主導となって行った視覚障害

者に向けた芸術鑑賞プログラムへの参加は、自分にとっても価値観の変わる大きな出来事となりました。また、子どもへの展示説明やワークショップを通して、芸術鑑賞は難しいことではなく、自分の感じたことを素直に表現することの大切さを知ってもらいたいと思うようになりました。

その後は多治見市モザイクタイルミュージアムのオープニングスタッフとして1年間、主に広報の業務に携わりました。テレビ、ラジオ、雑誌などの取材の対応が多い日だと1日3～4件あり、一生分マスコミに出たような気がします(笑)。多治見市という陶器の地場産業に、外部の人間である自分が関わるということの難しさも実感しました。

美術に関わる仕事を求めて

市原 萌絵さん 33期卒

美術学部 美術文化学科



市原さんが関わっているアート&デザインセンター情報誌《Bie》表紙。最新号は51号。

いちらはもえ/1984年、愛知県一宮市生まれ

2006年名古屋芸術大学美術学部美術文化学科卒業

卒業後出版社を経験後、あいちトリエンナーレ2010にて、広報業務を担当。

2011年一宮市三岸節子記念美術館にて教育普及担当学芸員。

2016年、多治見市モザイクタイルミュージアムにて広報を担当。

2017年より、名古屋芸術大学西キャンパスアート&デザインセンターにて勤務。



建築家藤森照信氏設計の多治見市モザイクタイルミュージアムをバックに、ゲストと共に記念撮影。



盲学校でのワークショップの様子。手前が市原さん。

——学生の頃思い描いていた自身と現在について、だんだんこうなりたい!と思う姿に近づいてきたような感じでしょうか?

思い返してみるとたくさん転職していますが、一貫して私が目指してきたのは「美術に関われる」ことと「文章で表現ができる」ということでした。学生時代は美術文化学科にいたにも関わらず学芸員として働けるなんてまったく思っていなかったのが、本当に運がよかったなと思います。

どうしても5年間働いた公立美術館との比較になってしまいますが、これまでは高齢のお客様の対応が多かったので、大学では20歳前後の若者ばかりという環境になかなか慣れませんでした。ですが一回り以上も若い学生たちと接していると、今の子どもたちは優しい子が多いなあと感じます。

男女関係なく仲も良く、自分が学生のときはこんな風ではなかったような気がして少し羨ましくもあります。

A&Dセンターで展示を行うのは、外部で展覧会を行うときの練習のようなもの。学生の皆さんに卒業し、外に出た時しっかりできるように、ここで基本を学んでいってほしいと思っています。何事も経験だから頑張っ!と思うようになったのは、この大学という環境が大きいですね。自分が年を取ったというのがありますが・・・。

大学に通っていた4年間は書店でアルバイトをしており、就職活動も書店を受けていました。結果書店は落ちてしまい出版社に就職しましたが、先ほども言ったとおり自分が美術館で働くなんてことはまったく想像もしていなかったです。授業も教育普及系は全然取っていないで、でもいろいろ

ろなご縁が積み重なって現在の仕事に繋がっているのも、好きなものや興味のあることに絞って仕事を探してきてよかったなと思っています。

——この夏で、お仕事を休まれると伺いました。

これまで好き勝手自由に生きてきましたが、なんとこの度子どもを授かることができました。子どもを生むということ考えたことがなかったので、人生何があるかわからないとビックリしていますが、仕事でたくさんの子どものもと関わってききましたが、自分の子どもに会うのは初めて。子どもをもつことで仕事についての考え方もまた変わってくるのかも、と不安もありつつ楽しみです。妊娠・出産・育児が自分自身の成長にも繋がるといいなと思っています。

ギャラリーでの落合さん。